會報

1962年12月　224　日本山岳会

鈴木牧之と高頭さん

高野鷹蔵

本誌二二〇号に、小野幸さんが「牧之」という題で鈴木牧之（北越雪譜の著者）のことを書かれたので、その驥尾に付して、私の思い出を書きます。

山岳会が創設された頃、多分高頭さんに見せられたのであろう、「北越雪譜」を見て、牧之の業績について強い印象を受けた。そして牧之の真似をしたわけではないが、「雪具」と「ワラジ」（草鞋）を集めだした。

もっともワラジはその頃の山登り用具の主要のものであったからでもあり、信州、飛騨、越後等々から伝手（つて）を求めては蒐集したものが、大箱に五、六杯くらい集まったが、結局は鼠の巣になりつつも、大正十二年の震災で煙と消えてしまった。

その中には故木暮君から、当時の台湾の生蕃が作った、竹の皮を編んで作ったワラジもあった。各地各様の蒐集品の中で、麻の苧で作ったものは、一番丈夫そうであり、大いに期待されたが、これは平地を歩いてるときは、すこぶる丈夫ではあるが、（もっとも大分重い）一度河渉りをすると、水分を吸い込んですこぶる重くなり、細い繊維（センイ）が水を含んでヌルヌルになり、岩から岩へと足を運ぶと、すべってすこぶる危険であることが実際に使用してわかった。

草鞋（ワラジ）の研究といっても山で永持ちすることの必要性で、すこし多人数（人夫など）で山歩きすると、その消費量が多くなり、現に赤石山に行ったときなどは、総量が一人の背負量となったほどである。殊に吾々のごとき都会人はワラジのはき方はすこぶる下手で、一日二足も費やすこともある。

武田（久吉）君などは、日光の兎耳のワラジを大いに推奨したものであるが、結局このときは、普通のワラジにボロ布を混えて丁寧に作ったもが一番永持ちがして、われわれ都会人に向くことがわかった。

東京や横浜でワラジを買うと、謂わゆる「車屋のワラジ」と称する、細長く小さく作り、足の底に当るほどであって、山用には全く不向きなものであった。

今の山登りをする方々にはワラジの必要性もなし、いまどきワラジをはいていたら、チンドン屋と間違われるかも知れない。

このほかに私にとって「牧之」はすこぶる因縁のあることがある。私が専攻しているカナリヤ（飼鳥）について、牧之が丹念に残してあった色々の資料の中に、例の八犬伝の曲亭馬琴の自筆自画した、「金雀養方」と言う稿本のあることが、今から九年前の昭和二十七年に、作家の松岡譲氏（長岡市在住）によって発見された。

松岡さんによると牧之の資料は、馬琴研究家の重要な資料であるが、どう言うわけか此の馬琴の「金雀養方」は見落されていたものだという。

ところがいろいろのいきさつがあり、これを公表する運びにならなかったが、ようやく今年になってこれを公表することができたことは、この馬琴のカナリヤ書は、わが国最初にして最古のカナリヤの飼い方を書いたものであり、今日までわれわれの間では、カナリヤの渡来は天明の末（一七八九年）としてあり、馬琴のこの書は、その後三十五年の文政七年（一八二四年）とあるので、当時としては馬琴はかなりの新しいもの好きであったと言えよう。

もっとも馬琴の鳥好きは、われわれの如き文学関係外のものも良く知っているほど、有名ではあるが、今日、東洋文庫（駒込上富士前町）に、馬琴が最も終生愛着を抱いていたという「禽譜」は残っている。

こんなわけで、鈴木牧之という名は、私には思出深いものがあり、高頭さんの「日本山嶽志」と牧之の業績と、なんだか似てるように思われてならない。高頭さんの故郷も、牧之の故郷の越後塩沢町とは、そう遠くもなし、「日本山嶽志」の出版についても、牧之の「北越雪譜」ほどのいざこざは無かったものの、その出版経過を知ってる私には、同じ越後の土豪という一脈相通ずるものがあるだけではない。

（三七・六）

▼会費納入についてお願い

・年度末も近づきましたので、未納の方は至急お払込下さるようにお願いします。振替（東京）四八二九番

回想の岳人 (1)

中島正文

終戦直後私は、昭和二十一年三月に類焼の難にあって、書物類や記録など収蔵して居た書物蔵を焼失させ、山岳図書は勿論、日記メモまでもすっかり灰にしてしまったので、確かなことは今ではチョッと書きにくいが、その点は前以ってお許しを得ておきたい。

確か昭和十七年春の或る日の午後であった。地下鉄虎の門駅を出た私はポカポカと暖い日ざしを浴びてぶらぶらと不二屋ビルの方へ歩いていった。久しぶりで地方から上京して、山岳会事務所を訪れるということは大きな満足で、なんとなく心楽しくホクホクと昂奮していた。三階の事務所へ辿りつくと、まだ主事の塚本繁松さんが出勤でなく扉がピタリとかたく閉っていた。

山岳会事務所の金文字を眺め乍ら、少し当惑した私は、何うしようかしらと一寸立ちすくんでいると、廊下の隅に二人の人が立話していたのが、話を止めて私の方を振り向いた。この人達も事務所を訪れた人達らしく、私の当惑顔を見て、

「もう塚本さんが来られましょうから、暫くお待ちなさい、私達も待っているのです。」という言葉に私は力を得て、よい伴れが出来たとホット安堵の胸を撫でた。

私に声をかけた一人の紳士は紺背広の中年輩の人、今一人はカーキ色軍服も厳めしく、剣把を握った浅黒い容貌の少し若い方であった。後とで塚本さんの紹介で、先の方は藤島敏男氏、軍人の方は黒田孝雄氏と知った。

塚本さんが現れるまで、二三十分は優にあった。私は未知の人に話しかけることは億劫な質であり、話しかけられる二人にも迷惑だろうと思って控えていたが、二人の話声は断続して私の耳に入って来た。藤島さんの幾つかの言葉が時に鋭く聞えた。

「馬鹿な戦さだ。アメリカと戦うなんて馬鹿なことだ。少しの勝ち戦さなんか、今に何うなるものか、馬鹿な。」と如何にも吐き出す様に軍服の人に話しかけていられる声が私の耳に異様に響いた。

連戦連勝、北に南に皇軍に凱歌が上がっているのに、この紺背広の人は何を勘違いして憤慨しているのだろう。日本を盟主とする大東亜共栄圏の雄大な構想も着々進捗せんとしているのに、何の世迷い言をいわれるのかと、少し憤懣を覚えてジッとこの人のホワイトカラーのあたりに眼を据えたものであった。

軍人の方はこの間も始終沈黙して何かしら考えに耽っていらるる沈思の姿が、私にはなんとなく奇妙に目に写った。何か軍人らしい力強い反駁がなされるのでないかと伺っていたが遂に藤島さんの一人喋りの慷慨に終った。

やがて階下から威勢のよい足音が響いて、塚本さんが「遅くなった。遅くなった。」と言い乍ら廊下に現れた。扉が開き、招じ入れられた三人が、事務所内のテーブルを囲んで一息ついた所へ、鳥山悌成理事が見えられ、続いて二、三の人が訪れて狭い事務所が一杯になった。

人々の間に取交わされる話は、何となく山岳の話よりも戦さ話に花が咲いた。ついつい今し方、無遠慮に勝戦さを批判せられた藤島さんも、今度は沈黙の方に廻って始終、黒田さんと二人で、人々の談笑の聞き役に廻っておられるのも私には奇異に感じられた。

そうした所へ一人の若い人がそそくさと入って来た。

「明日は応召入営します。山岳会だけは無断で失敬も出来ぬから、申し送りに来ました。」と言い乍らテーブルに向って何か忙し相に書き出した。この人は山岳会々報を受持っている望月達夫君と直ぐ判った。

「僕も直ぐ入営します。」と黒田さんが珍らしく快活な調子で語り出したので、私は調べていた山岳古書から顔を上げてジッと黒田さんの顔をふり返って眺めた。

この人達はすぐにも応召して勇躍戦場に赴くと言うに、寸閑を盗んで、懐しの心の故里、日本山岳会に最後の別れを惜しみに来たのかと思うと何となく大きな感慨がこみ上げて来て、ジーンと眼頭の熱して来るのを覚えた。岳人の山恋いのド性骨を今こそ見つけたりと言う気がして頭が下がった。

私が黒部奥山の史的研究を一応完成して、それを何処へ発表しようかと考えた末、日本山岳会の「山岳」が最も好適と思って、当時副会長であった黒田さんに相談をかけ、随分と我がままな注文を付けてお願いしたが、黒田さんが快く承知されたことの有難さに、何時かお目にかかって親しくお礼を述べようと念じていたのである。それがこんな最後の場面で申上げねばならんとは、実に感無量であった。が致し方なく私は、名刺を出して御好意に対するお礼を申述べたが、黒田さんはただうなづく許りで名刺さえ手に取られず、何か放心した様な態度であったことが私の大きな気がかりとなった。名刺は机の上に暫くそのままになっていたが、帰るさに藤島さんがソッと私に返して下さった。

私は図書室から借り出して調べていた、山の書物を塚本さんに返戻して二時間後、何となく気がかりな山岳会事務所をあとにした。

これが虎ノ門の事務所とも山岳会の夥しい蔵書とも、黒田さんとも、塚本さんとも永遠の別れとなった一と幕である。

山岳会事務所の廊下にたゝずむ軍服姿のなにか淋しかった黒田さんの風貌は、今も黒部の文献を筆にする毎になつかしく彷仏として私の眼底に浮んで来る。それ程、この場のシーンが私の脳底に鋭く劇的に残った。

昨年（一九六一年）八月は黒田さんの十七回忌ときいた。

私は追悼会に集った顔ぶれの中に藤島さんの名前を見つけて、この人が当時、盟友を予知される死地に送らねばならぬ無力の自分自身に如何に懊悩の限りをつくしただろうと、あの慷慨の口ぶりを思い出して、心からの同情を寄せ、私の迂愚を慚愧したのである。

中村清太郎画

大井川しぐれの宴

中村清太郎

旧友たちと共に、静岡支部の肝煎りで、久濶の大井川に向う気もちは、複雑で又無量の感慨に溢れた。富士見峠では時雨になり、ダムを見下す開墾地あたり、茶が冷たく濡れて、大井川の気息が漲る。

深山茶の窓にしぐれて大井川
蒼茫と暮れかかる田代を経て、東河内で車を捨てる。

桑滄の山河しぐるゝ涙かな

たそがれの河原で、しぐれの中の野宴はシシの肉のバーベキゥで杯を挙げて、豪華なものだった。雨と烟と酔いの中に出没する顔は、生面の人もあれば五十年の知人もあって、何か物語りの一節のような気さえした。

河内の出合いの小屋に雑魚寝した翌朝は、思いもうけぬ美晴で、真盛りの紅葉が谷のくまぐま、尾根の曲折を飾って、そこへ昨日の雨が峯に新雪をもたらしたから、霜葉と相映発して、さすが大井川なる哉とうなずかれる。

大井川紅葉に映ゆる峯の雪

上河内岳に向った藤島さんたち、大日峠への松方さんら、梅ヶ島への足立さん達とも、定めし奥山の雪色を満喫されたことと思う。

東河内の奥に新らしく出来た温泉は、その後入湯の機を得たが、幽すいを極めた壷中の別天地であった。私は半世紀の知友である井川山岳会長の滝浪善一さんの客となって、なお附近の霜葉と雪山に親しんでいる。（十一月念六、田代滝浪邸にて）

× ×

静岡県支部主催 第五回 紅葉会

十一月十日～十一日

▼出席者、松方三郎、日高信六郎、中河与一、村井米子、小原勝郎、小原晴子、今井雄二、折井健一、折井正子、佐藤佳年、古沢肇、沼倉寛二郎、神谷恭、野口末延、藤島敏男、中村清太郎、足立源一郎、石原憲治、堤操、小野利次、松本熊次郎、田口三郎助、阿部慶子、建石八重、山崎金次郎。（静岡県支部関係）尾崎忠次、尾崎夫人、西野勢作、河村栄二、岩永安雄、杉山正洋、鈴木璋一、川端信治、柴田昌亮、内藤正広、長田義則、萩野恭一、山本朋三郎、牧野衛。（静岡山岳会関係）鈴木正平、河合俊男、松井博、山田透、鈴木続、清水倶子、伏見喜代枝、稲葉まさ子、菅野敏子、朝倉よし子、村あや子、森まつよ、他二名。（県観光課）沖和雄、山本覚、石上謹治、竹下常夫、渡辺茂男、中村博、小野田昭四郎、村松浩、平田博子、山本とと、山田あつ子他三名。大井川鉄道KK一名。地元井川村村長他三十五名。

東京支部関係三十七名、静岡県支部十三名、静岡山岳会十四名、県観光課十四名、地元井川村三十六名　計一一〇名

Wilfrid Noyce の遺著 THEY SURVIVED

今井雄二

ウィルフリッド・ノイスが去る七月英ソ合同登山隊の一員として、ソ連領パミール高原に遠征中、ロビン・スミスとともに遭難死したことは、本会報222号に松田雄一氏が図書紹介欄で書いておられるが、彼の遺著ともいえる"They Survived. A Study of the Will to Live."が十月ロンドンで出版された。

この本には一月の日付でノイス自身の序文が載っているから遺稿の刊行ではなく、生前自らの手で出版の手配をすませていたものと想像される。しかし不幸にして彼はそれを待たずに遭難死してしまったので、いまわれわれが手にするのは彼の遺著となったわけである。

ノイスの著作のうち「エヴェレスト――その人間的記録」(浦松佐美太郎訳)、「冒険――この駆りたてるもの」(進藤純孝訳)、「マチャプチャリ――ヒマラヤで一番美しく険しい山」(深田久弥訳)などの訳書もあるが、透徹した感性と、豊かな学識をもって書かれた彼の文章の魅力についてはすでに定評がある。彼は優れた登山家であると同時に詩人でもあり、小説も書いている。また"Scholar Mountaineers"という著作にも見られるような学究の徒でもあった。

登山家としてのノイスは一九五三年のエヴェレスト登山隊の一員であったことでも知られているが、その後も中央ネパールの未登峯Machapuchre(一九五七年)、カラコラムのTrivor(一九六〇年)にも登っている。Trivor(七、七二〇m)はパキスタン政府の測量長官でさえその存在を知らなかったという山で、その登頂記が"To the Unknown Mountain"と題して今年初めに刊行され、彼の著作中随一の書だとも評されている。

さてノイスの"They Survived"は純粋に山岳書とはいえない本である。山に限らず、人生経験のもっと広い範囲にわたって、常識や科学で解明できないような、いわゆる奇蹟の生還がなされた事実をとりあげ、なぜそのようなことがありえたかという問題を追求しようと試みている。

ここにとりあげられているのは、まずスコットランドで二十三日間生き埋めになってなお生きていた炭坑夫、オーストリアで雪崩に埋まったままやはり二十三日目に救い出された男、それから一袋のジャガイモと四〇ポンドの粉だけでヒマラヤ一五、〇〇〇フィートの高所で単独越冬したヨガ行者の話に始まり、ガンと戦ってこれを征服した人たち、ナチの死の集団キャンプから生還した婦人の話などもある。しかしわれわれは自然との死闘から生き残った人たちを扱ったものの方により興味をひかれるであろう。

たとえばインドシナへ向かう輸送船から脱走して海中へ飛び込んだ二人の北欧兵が、小さな筏に乗ったまま印度洋を三十二日間漂流し、その一人だけが生き残って僚友の死体をつれて漂流をつづける話や、オックスフォード隊がヒマラヤのHaramosh(七、三九七m)登攀中、雪崩に落とされて氷壁の底からピッケルなしで六〇〇フィートの壁を攀じ出ようとして何回もまた底へ落ちていく、まるでアリ地獄に落ちたアリのような死闘の描写、またアフリカの砂漠のまっ只中におき去りにされた落下傘部隊の一兵士が、熱砂の上を水も食料もなしに幾日も彷徨した果てに

……彼はとうとう絶望して大きな石をつまみあげた。しかし彼は自殺するだけの力さえないのがわかった。自分の頭に痛みを与えることさえできなかったのだ。彼は砂に身を埋めてしまおうとしたが、その前に発作的にまた歩き出した。ロボットのように、それとも夢遊病者のように、頭を胸に沈めたまま歩いていった……

というような文章を読んでいると、よくもそれで生還できたものだと驚かざるをえない。

そのほか極地での単独越冬生活について、北極でのオートコウルドと、南極で↖

プモリ(7068 m)の初登頂

吉沢一郎

エベレストの西にある遠見には可憐な山、プモ・リ(正しくはプマ・リか)も遂に登られた。シェルパ(Nima Tensing, Nima Dorje)を除けば、僅か四人の遠征隊であった。測量、偵察、映画を含めてこの山にとっついた遠征隊は過去に七つある。(〃山渓〃十月号参照)

今度成功したのはドイツのGerhard Lenserを隊長とし、これにスイス人Ernst Forrer, Ueli Hürlimann, Hans Rützelが加わった独瑞合同隊である。ここには隊長の報告を日誌風に変えて紹介しておくことにする。

1962.3.13――カトマンヅー発。

4.4――プモリ下のBC(5300 m)着。休養、高度順化。

4.15――西側及び南東側の偵察。

4.21――CI(5500 m)建設。

4.23――北東山稜への登攀開始、アイガーの北壁にも比すべき七〇〇メートルの岩壁に挑む。

4.28――岩壁の途中にある氷の棚にCII(6050 m)、このビバーク地は非常に役に立つ。ナダレや落石からも安全であった。

5.3――ここから六日目に、プモリ山稜の始まる鞍部に達し、CIII設置(6220 m)。悪天続き、北東山稜における攻撃何回も失敗する。

5.9――E・フォレルと隊長は休養をとるためBCに下る。高く峻しい場所での苦

↙のバード少将とを、その環境と心理と行動とを比較しながら、それぞれ死線を越える経路を書いているのも興味が深い。

ノイスはこれら数多くの生きた事例を克明に追求して、最後に彼らを生還させたものは何かを探り出そうとしている。彼はいう。

人間の肉体的な力には限度がある。二十フィート飛び上がることも、大西洋を泳いで渡ることもできない。しかし実際には科学的に見て到底不可能な体力の限度を超えて生命を耐え抜くことができた例が以上のように幾つもある。なぜそのようなことがありえたのか。

まず知りうることは、おかれた環境に順応できる人と、できない人があるということである。徐々に登れば高所順応によって八千メートルのヒマラヤ頂上に立つことはできるけれども、いきなり飛行機からそこへ下ろされたとしたら生命を保つことはできないであろう。極地探検家の指は寒気順応の結果、マイナス四〇度のもとで金属を扱うことができるようになる。この環境順応の能力が到底考えられないような生命の耐久力を与えるのであるが、その能力は人によって異り、能力を備えたものが生き残る。この能力は訓練と経験によっていっそう強められることが多い。

さらに心の面についてみると、また環境に順応できる能力をもつものと、ないものとがある。輸送船から脱走して漂流した二人の兵士のうち、一人は頑丈な体躯の持主であったが喜怒哀楽に敏感であったために死亡し、体格は劣っていたけれども平静な心の持主であった一人は生き残ることができた。この平静な心はかのヨガ行者はもとより、坑内や雪崩の下に二十三日間も生きぬいた例などと共通なものである。

もう一つすべての生還者について共通なことは、死地にあって誰れからかの援助や励ましを受けていることである。それは同伴者とか、救助の手だけではない。祈りによって神とともにあるという信仰の場合もあるが、それらとはまったく別に、誰れだかわからないがいっしょにいてくれる人があるという実感をもったという例が幾つもある。

オックスフォード隊の一人はいつも傍らにもう一人がいっしょに行動しているのを感じた。漂流して助かった脱走兵もやはり誰れかわからないが、ほかにもう一人いてくれるのを感じた。

ノイス自身もヒマラヤの高所で同様の経験をもったことがあるし、スマイスもヘルマン・ブールもその他の登山家もそれを経験したことを語っている。その誰れだかわからない存在によって孤独と絶望から救われたのである。

この得体の知れない存在は何か、なぜ絶望的な危機に現われてくるのか。それは潜在自我が意識の面に顔を出すものと考えたらどうであろうか。ウィリアム・ジェームスのいうように、われわれの意識する自我は氷山の一角に過ぎない。意識しえないところにどんな大きな潜在自我があるか、生理学も心理学も精神分析学もまだそれを探ぐりあてることのできない世界である。それは或いは他の潜在自我にもつながっていて、バード少将が南極の空を仰いで、自分は宇宙と一体であると実感させたのもそのためではあるまいか。

だがしかし、その「第二の自我」の解明は現代科学の及ぶところでなく、どこまで探究してみても「かくて果て知らず…」とミルトンの言葉でノイスは結んでいる。

いまこの本を読んで、「生還した人々」のことを書き残したまま、彼自身が生還しなかったことに、運命の皮肉というのにはあまりにもきびしすぎるものを感ずるのである。

Wilfrid Noyce : They Survived. A Study of the Will to Live. pp. 202 with photos pp. 36. Heinemann, London. 1962. 25 s.

（一九六二・一二・五記）

川喜田壮太郎

労でかなり疲れていた。この間、H・リュッツェルとU・ヒュルリマンはシェルパとともに、各キャンプにザイル、ハーケン、食糧の補充をする。そしてザイル600mを固定して手摺りとし、シェルパの登降を容易にする。この山の規模も困難さも案外大きいのに驚く。

5.12——全員CⅠ集合。HとRはCⅢから下る時に吹雪と落石に痛めつけられたのでいささか意気鎖沈。

5.13——L、F、Hは五日間の荷物（ビバーク用品、小テントその他）を担いでCⅢに向う。

5.14——天気再び悪化、テントに閉じ込められる。

5.15——CⅢをあとにし、山稜（非常に悪い）の半分を通過し、正午すぎ（翌日わかったのだが）大きな雪庇の上にCⅣ（6425m）。天気は上乗。

5.16——晴、五〇メートルの氷壁に午前中の大部分を使用、夕方になって山稜終り、五〇〇メートルの高さの氷壁の根元に達した、CV（6650m）。

5.17——午前六時氷壁にとりつく。見かけよりは組し易し。氷壁終り午前十一時七分、小さな三角形の頂上台地に立つ。登頂者はL、F、Hの三人。滞頂一時間、無事CV着一泊。

5.18——上天気、山稜を下りCⅢへ。

5.19——岩壁を下りてCⅠへ。

5.24——キャラバンとともにBCを去る

7.9——ネパールをあとにし、八月それぞれの故郷に戻った。

カット・故茨木猪之吉

中房温泉の日本アルプス登山者名簿

日高信六郎

かねて高山信濃支部長に誘われていた中房温泉に、九月なかばの三日間を過した。大正三年の夏一高旅行部の団体登山で二泊して以来まさに四十八年ぶりである。明科駅から歩いたことを思い出しながら、松本からバスにゆられ、有明で車を換え、有明神社のそばを過ぎ、信濃坂を越える。あのときわれわれの案内をつとめた横沢類蔵はこの辺の茶屋に住んでいたし、畠山善作はまだ若い人夫として一行に加わった。当時一泊二十一銭だった宿はいま立派な本館の浴場や大広間が竣工間ぎわで、面目を改めるところであったが、温泉はなめらかで、多種多量なこと旧の如く、どことなく昔ながらの山の湯の趣きを存しているのはうれしかった。ただし登山者は殆ど素通りで、下山者のなかに泊るお客がある程度だという。

温泉ではご主人の会員百瀬孝君夫妻の歓待をうけ、一夕高山、百瀬君と鼎座、飽食痛飲して楽しい山話に時を移した。百瀬君に見せてもらった、ふるい宿泊人名簿をめくって、知人の名前を見出すのはなつかしく、その頃の登山界のようすもしのばれて、まことに興味ぶかいものがある。

いま取り出してあるものは大正七年から十一年まで五年分四冊、立派な布表装和紙綴りの冊子である。そのうち目についたものを書き抜いて見た。

大正七年のは「日本アルプス登山者芳名録其二」と題し、七月から始っている。

「慶応義塾山岳会第一隊第二班常念山脈縦走」とある隊のは日付がないが、そのメンバーには見田幸夫、早川義郎などの名が見える（三田を見田と誤記したのは代筆したリーダーあたりの筆の誤りだろう）。

七月二十三日には「京都府立京都第一中学校山岳部」の今西錦司、西堀栄三郎氏ら二十六名がずらりとならび、

七月二十五日のところには、「東京高等師範学校附属中学校桐蔭会山岳部第七回旅行記念」と書いて、部長田中啓爾以下監督、卒業生、生徒計五十一名の大ぜいの中には、卒業生伊藤徳之助（故人、本会会員）、諸井貫一、四年生中島健蔵、三年生正田英三郎諸氏の名が見え、

七月二十八日には東京大関久五郎先生が「燕岳より上高地へ向け発」している。

八月一日の海軍経理学校梓会の諸君は田部（重治）教授（本会名誉会員）を筆頭に十名の一行、

八月三日「日本アルプス登山」と書いているのは東京大尉永田鉄山。松本西沢耕一。松本割烹青木滋数。甲府市相生町佐々木茂作の四氏であるが、永田氏（信州の人）は同月十二日に再遊して、「燕岳登山」と題し、次のような興味ある記録をのこしている。

「永田鉄山。同文子。尋常小学二年在学、同鉄城、満七年八ヵ月。未通学、同松子、満五年八ヵ月。中学校二年在学、轟侑。右登山ノ為五時間、下山の為三時間半を要ス。両児共全行程徒歩、但女児ノ分ハ帰途二個所数分間背負ヒタルモコハ疲労ノ為ニアラスシテ下山ヲ急ギタル為ナリ。両児共平素健康程度普通ナリ。下山後何レモ疲労の色ナク翌日モ何等平素ト異ルナシ

右幼児登山ノ参考ノ為特ニ誌ス（花押）

八月三日永田一行の次には「長野県松本女子師範学校長矢沢米三郎」とあり、それに続いて、岩波茂雄、上野直昭、高橋穣、三氏連名、次行に「大正七年八月七日燕、大天井、東天井、常念、鎗ノ諸嶽縦走ノ途に就カントス」との記載がある。

永田一家の登山記事に続いて、ほそいペン書きの文章が一枚半ばかり、署名は最後にある。

「島々から上河内—蒲田—福地—平場—白骨を一巡り、再び上河内からじめじめした森林の腐葉土とごつ〳〵した岩角を踏みしめ、今日只今—大正七、八月二十五日午後三時—当温泉に踏み込みました。何の事はない所謂日本アルプス地方の温泉場を遊び歩いたやうなもの。その間には乗鞍にも上り、焼岳の噴煙にも咽び、鎗頂上の少さなお宮にも腰をかけました。敢て山岳の霊気など、月並な事は申しませんが、とにかく面白い日本の公園巡りでした。嬉しかったのは種んな形の雲と綺麗な渓谷の清水と可憐な草花と。いやだったのはいたる所の旅舎や小屋の蚤とむせ返るたき火の煙でした。

上高地はお伽話にでもありさうな土地で、人間離れのしたあたりに興味がありますが、こと（中房温泉）や蒲田はまた山間の浴場としてローカルカラーの濃い点に別種の味があります、とでも申しましょうか……

大正七、八月二十五日

東京の　水谷竹紫

序に申す、小生は体重十九貫心臓が弱く横に肥って頗る健脚の要素を欠ける男なり。しかも牛歩遅々主義を以てどうとかかうとか、人の登る山々には上って見た。日本アルプスなんて、そんなに仰山なものではなささうだ……というのはほんの素人観に過ぎないだらうが……」

なおこの年の分には横浜神戸のドイツ人が相当あり、十一才の少女の名も見える。

× × ×

大正八年の分は「日本アルプス登山者芳名録」と題し、その第一頁には「山ノ話　先ツ登リテ語リ而テ聞ク可キモノカ」とある。

七月十日付で「燕、天井、常念、鎗、穂高、焼等の諸岳を突破する予定」と張り切っているのは、或る有名な商社の社員、のちにその大幹部になった人と外二人だが、その頃はもちろん、今でも大天井のテッペンで「てんどん」が食べられるか頗る疑わしい。

七月十一日に着いた第一高等学校旅行部第二隊七名の中には元会員の故岸偉一君がいる。

同月十七日に竹内鳳次郎、妻いさとあるのは、当時には珍らしい女流登山家で、令兄は後年篤学の植物学者となり、惜しくも早世した故岡田要之助君である。ご主人は郵船会社の船長と聞いた。

七月十八日には「日本アルプス開山岡野金次郎。岩崎福太郎」両氏の署名があり、上部欄外には「鎗ケ岳、初登山、明治廿九年（同行小嶌烏水）」とある。

翌十九日のところ、「慶応山岳会第一隊第一班。常念山脈ヲ縦走シテ槍ケ岳ヨリ穂高岳ニ至リ上高地ニ下ル予定」という案内人兼リーダー斉藤新一郎以下総員十四名、人夫六名の末尾に大島亮吉氏の名が見える。

七月二十九日には徳川頼貞外五名、同三十一日のところには大町桂月、原田三夫、加藤美倫三氏の署名があり「有明。明日燕、大天井、常念、槍、穂高を経て上高地に向ふ」と書いてある。

このほか発足忽々の信濃山岳会第一回登山記念の署名には松本その他のお歴々が名をつらねている。

× × ×

大正九年から十年にかけての分は「登山芳名録」と題する。

その中には次のような注目すべき記載がある。

「大正九年七月七日松本発常念を経て坊主小屋に泊り同九日午後槍ケ嶽の絶頂祠、東北側より下降人跡未踏の東鎌尾根を縦走拾時半奥貧乏沢付近の河原幕営翌日雨中高瀬原流に沿いて水流多き為尾根伝いに出合に出で幕営此行程僅に一里半拾壱日大町に向て伝兵衛小屋下流釣橋付近迄到しも大出水の為橋墜落しおり渡る事を不得正午引返し東沢を溯りて中房に下る時に午後六時

東鎌尾根縦走記録保持者
日本山岳会員　土橋　荘三
信濃山岳会員　熊井　博人
同　寺島今朝一
案内者　小林　喜作
強力　浅川　茂利」

右のうち東鎌尾根とあるのは北鎌尾根の誤記であって、同様の記事は山岳十五年一号の会員通信欄にある。大正元年と二年の二回にわたるウエストン師の北鎌尾根上部からの槍登攀に次ぎ、日本人として最初の北鎌尾根下降であることなどは、山崎安治君の好著「穂高星夜」二三七頁以下にくわしく記してあるが、この芳名録の一文は下山忽々意気軒昂たるあいだに記されたものとて、一読興ふかいものがある。なお土橋氏は大正末から昭和はじめにかけて果敢な登山を実行されたが、戦後松本でなくなられたそうである。

その他、七月中には東京高師教授、東大講師の佐藤伝蔵氏が天然記念物調査のために来られ、

法曹山岳会の占部喜太郎、名川侃市その他大ぜいのかたがたが槍岳縦走に向い（二十一日）、

鳥山悌成さん（本会名誉会員）は日光、勝、榛名のみなさんと上高地に向っているし、

東京府立第三中学校山岳旅行隊十名の中には船橋町の篠田軍治氏（本会評議員）があり、

八月に入るとB. All（会員）、牛場友彦、東大生香山蕃氏ら八名のアルペンストック会同人が名をつらねている。

信濃山岳会の第二回登山会が行われたのもこの年であった。その一人木曽御料局の辛木宣夫氏はわたくしの中学同窓の先輩である。

× × ×

大正十年の五月二十二日には「燕、東鎌尾根より鎗縦走」に向った早稲田大学山岳会の舟田三郎、麻生武治、慈留辺留・寿安（註、ジルベール・ジュアン）三氏の名が眼立ち、

七月二十日には黒田正夫、沢本千代二郎、同三郎、南波二郎など六人のモサが「夏の雪をたべにコニャックかついで登りました」とやって来ているが、八月と誤記しているのはコニャックの所為だろう。

文月二十二日付で「鎮西乃浪人伊藤隼。槍に向う。穂高を探れは日本に余す山無きを悲む」と達筆で認めてあるのを読むと、ふるくから会員だった故人の意気さかんなことを想見させられる。

八月十日に来た成瀬岩雄君（本会評議員）はじめ成蹊中学生一行六名は有明山だけに登ったのだとは、当の成瀬君のはなしである。

この頃の登山者は有明山に登るものが多く、大正七年三田さんの一行も登ったそうである。昨年中房から往復した高山支部長の話によると、みちが荒れ、熊笹が茂ってむかしのみちあとや石の道程標がところどころに残っているだけで、歩きにくく、登り約三時間を要したそうである。

はじめの頃から、ずい分各地の中学、高校や大学の山岳部の名が見えるのだが、さすがに大正十年、十一年ころになると、「アルプス銀座」が開らけて来たと見えて、有名な登山家や後世名をなした若人の数が減って来る。

× × ×

大正十一年分は「日本アルプス登山者名簿全」と銘打っているが、全部日付がない。目につくものは、

東大法学部学生太田一郎（前駐伊大使）、第三高等学校山岳部四名のうち木村四郎七（現スイス大使）、

庭園協会、日本アルプス旅行会大ぜいの筆頭に田村剛、

名古屋税務監督局長に随行の事務官原邦道（前長期金融銀行頭取）の諸氏ぐらいのものであった。（了）

図書紹介

裏がえしのインド

西丸震哉著

一九六一年十二月から六二年の四月にかけインド中南部のジャングル地帯を二台の国産車を利用し一万余キロをまわった著者を隊長とする中南部学術探査隊の見聞記である。コースはカルカッタをふり出しに、ベンガル湾沿いに南下して東ガーツ山脈を奥地へ入り、そこの原住民と乾燥ジャングルを調べ、ふたたび海岸にでて南端までゆき、ケララ州からデカン高原を調査しながら北上、タール砂漠をかすめニューデリーにいたり、インド平原を東進、カルカッタに戻っている。「何でもみてやろう」精神のきわめて旺盛な著者のユニークな鋭い眼がインドのあらゆる事物にそそがれこれまで日本に紹介されていない珍しい風習や事物を興味深く伝えている。昨年の年次晩さん会の席上、出発直前の著者が、ライ病にかかってくるかも知れないといって、居並ぶ面々の度胆をぬいたが、今年の年次晩さん会にふたたび元気に姿をみせて、インド旅行の楽しいエピソードをいくつか話してくれた。蛇つかいやこじきから逆にたかる話などこの本は私たちがまったく知らない沢山のことを話しかけてくれる。（Y・Y）

昭和三十七年十一月二十日実業之日本社発行二四五ページ、三四〇円。

秋山記行

鈴木牧之著

「北越雪譜」の著者である牧之の没後百二十年を記念したかずかずの出版物の一つにこれもかぞえてよいのであろう。

「今年文政十ッ余り一の菊月初の八日、不図能き案内あるを幸に、年頃日ごろの念晴さばやと、信越の境、秋山遊歴につゑを曳かむと思ひ立侍りぬ。」というわけ。文政十一年は一八二八年、彼五十九才。

日程は九月六日、塩沢の自宅を出立、秋山に入り、八日児玉泊り九日は小赤沢、十日と十一日には湯本、十二日は上結東、そして十三日に小出に出る六泊七日の旅であった。この紀行はその間の見聞記といったものなのである。

これがわれわれ登山者にどれだけ益になるか、と問われると、ちょっと困ってしまうくらいの小さい価値のものかも知れない。しかし、そのことはこの本だけを読んだときの場合で、こんどのこの活字本は草稿本と清書本、それに前に出版された（昭和七年、越佐叢書第五巻の中）本のすべてを校合したもので、加えて正しい注釈の精密さは秋山記行の決定版といってよいであろう。写本を正しく活字にうつすことはまったくむづかしいことであろう。そのことをやってくれた努力には心から感謝せねばならない。

牧之はこの稿を上梓したいと江戸の一九や京山に依頼していたがついにその実現を見なかったものであったが、この昭和に入って二度も活字本となって世に生れたことは、彼も地下でよろこんでいるにちがいない。

なお私は、この写本を二冊見ている。その一つは昭和十五年頃、東京の弘文荘の反町氏に、他の本は昭和二十二年ごろ、会員の浅倉屋（吉田久兵衛）さんにで、反町本の表紙の見返しには、「此記行誠ニ備貴覧候甚ダ愧入候共辺地為御心得奉差上候草稿同前ナル共外ニ今一編切有之候ガカシ失ヒ候御一覧之上御返シ奉願上候　山東君牧之」と、天保六年、山東京山におくった彼の書翰がはりつけてあった。

この「秋山記行」は「秋山記行」全二巻と、戯作としてつくった。「一九牧之、秋山記行」の稿本とが内容である。（小野　幸）

昭和三十七年七月二十日、長野市・信濃教育会出版部、二八五頁函入、四〇〇円。

放送台本

〝マッターホルン登山鉄道〟

本会図書室備付の文献資料には、書籍の他に地図、写真、書簡、リーフレット等がある。この放送台本は、ギド・レイ作マッターホルン登山鉄道（日高信六郎訳、山岳第55年掲載）を、木原孝一が劇化し、NHKラジオ小劇場で、昭和37年9月14日、午後11時5分から三十分間放送されたものである。とき、現代。ところ、幻想のマッターホルン。登場人物タルタラン他十一人。巧みなアレンジで原作のもつ面白さをよく生かしている。謄写版、53頁（F）

37年度第6回図書委員会

十月十八日・ルーム

▼出席者　小林、深田、徳久、鈴木、大橋、古川

▽議事および報告

①寄贈図書の件　（大橋）

②購入図書

CHRONQUR・HIMALAYEN NE（理事会への依頼）（徳久）

③この一本展

●珍らしい本を愛蔵されている方に一冊ずつ持ち寄っていただき、ささやかな展示会を催す。期日は年次晩餐会のときに行なう。提供依頼五十名。（深田）

④洋書分類目録の件

●草稿がほぼまとまったので、深田、小林両氏に検討してもらい印刷にまわす。

⑤分類目録の代表的な図書の選定リスト提出（小林）

寄贈雑誌（和書）

		合本
岳人	1962	Vol. 165～167 東京中日新聞社
岳人	1962	Vol. 168～170 東京中日新聞社
山と高原	1959	No. 273～278 朋文堂
アルプ	1961	No. 41～46 創文社
アルプ	1961	No. 47～52 創文社
O・M・Cレポート	1958～61	No. 105～145 奥多摩山岳会

この一本展

37年度年次晩餐会にあわせて図書委員会で〝この一本展〟と銘うって、会員有志の蔵書の中より一冊ずつ当日お持ちいただき、それに簡単な説明を原稿用紙一枚程度にまとめていただき添えて展示致しました。第一回の試みにもかかわらず三十名の方の出品があり、それに山岳会所蔵本十点十七冊の出品があり、百名を越す盛会に花を添えることができました。

次に当夜展示された書名、著者所蔵者名（敬称略）を列記しますなお、同時にいただきました解説文は後日会報付録としてお送り致す予定です。

図書委員会

——この一本展——

所蔵者名	書名	著者名	備考
川崎 隆章	山上の楽園	川崎隆章編 畔地梅太郎画	限定版
町田 立穂	銀山平探検記	大竹庄次郎編	明37版
古沢 肇	日本九峯修行日記	野田泉光院述著	
瀬名 貞利	山頂漫歩	関口 泰	自筆和歌入り
藤島 敏男	山谷放浪記	小島烏水	藤島氏宛贈呈本
木下 是雄	南極記	南極探検後援会	諸氏寄せ書き藤木九三氏より贈本
纐内 信彦	書斎の岳人	小島烏水	烏水俳句入り
冠 松次郎	アサヒグラフ（登山家告板）		岳人の面影を偲ぶ
吉田 竹志	旅から旅	加藤岳堂	
村井 米子	山のしづく	別所梅之助	
石原 憲治	蔦温泉帖冬篭帖	大町桂月	豆本
日高信六郎	Alpinismo Acrobatico.	Rey, G.	1914 初版
山崎 安治	Fight for Everest : 1924	Norton E.F.	1925 署名本
岩永 信雄	Mt. Everest The Reconnaissance 1921	Howard-Bury, C.K.	限定本200部の内 No. 98
吉沢 一郎	The Pamirs and Source of The Oxus 1896	Curzon, G.N.	エドワード・ウィンパー署名入り
島田 巽	A List of the Writings, relating to the Alps or Switzerland.	Coolidge, W.A.B.	私家版署名入
小野 幸	Scrambles Amongst the Alps.	Whymper, E.	1873 米版 槙有恒氏ハガキ添付
小林 義正	Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps. 1896	Weston, W.,	ウェストンよりアーネスト・サトウへの献呈本
深田 久弥	Tintin au Tibet	Herge	ヒマラヤの漫画の本

所蔵者名	書名	著者名	備考
日本山岳会	高山深谷 第3～6輯	日本山岳会編	
〃	高頭仁兵衛氏書簡（高野鷹蔵氏宛）		
〃	続 スウィス日記自筆原稿	辻村伊助	
〃	日本山嶽志（明39）	高頭式	
〃	日本アルプス（明43～大4）	小島烏水	
〃	山の憶ひ出 二巻	木暮理太郎	愛蔵版百冊の内47番
〃	博物之友 第二巻（明35）	日本博物学同志会	
〃	Peaks, Passes and Glaciers, Asseries of Excursions by Members of the Alpine Club 1859	Ball, J. (Ed. by)	
〃	Peaks, Passes and Glaciers, being Excursions by Members of the Alpine Club. 1862 Second Series	Kennedy, E.S. (Ed. by)	
〃	Voyages dans les Alpes, precedes d'un essai sur l'histoire naturelle des environs de Geneve 4 tomes	de Saussure	

（係・大橋 晋）

寄贈図書（和書）

	書名	著者	発行所	寄贈者
5/15	秘境フンザ王国	島澄夫	二見書房	島澄夫氏
	丹沢	奥野幸道	朋文堂	奥野幸道氏
	南アルプス北部	北村武彦	山と渓谷社	北村武彦氏
	山恋の記	村井米子	河出書房	河出書房
	美ヶ原霧ヶ峯夢科	坂倉登喜子	実業の日本社	実業之日本社
	インカの山を探る	竹田吉文	朋文堂	竹田吉文氏
	冬山教室	岡部一彦	山と渓谷社	山と渓谷社
	女六人ヒマラヤを行く	細川沙多子	朝日新聞社	朝日新聞社
	女五人ニュージランドを行く	佐藤テル	実業之日本社	日本ニュージーランド女子親善隊

37年4～10月（係・小沢）

	書名	著者	発行所	寄贈者
	剣の窓	山崎安治	二玄社	山崎安治氏
8/30	白山	北国新聞社	北国新聞社	北国新聞社
	渓	冠松次郎	筑摩書房	筑摩書房
	山を想へば	百瀬慎太郎	百瀬慎太郎遺稿集刊行会	百瀬美江氏
	槍・穂高・常念岳	田淵行男	実業之日本社	実業之日本社
	富士山と三ツ峠	渡辺正臣	〃	〃
	白馬と鹿島槍	大町山岳研究会	〃	〃
10/22	雪と岩	ガストン・レビュファ 近藤等	新潮社	新潮社

ノエル・ベーカーと山を談る

日高信六郎

英国の下院議員でノーベル平和賞を受けたノエル・ベーカー氏は、NHKと日本国際連合協会に招かれ、昭和三十七年十二月一日来朝し、十四日香港に向け出発するまでの間、東京で講演し、広島、京都、奈良など各地を巡って、被爆者や湯川博士など多方面の人に会い、天皇陛下に謁見し、池田首相と会見するなど、多忙の日を送った。

氏は学者、政治家として、たびたび大臣や国際会議の代表をつとめ、軍縮問題の権威であり、平和運動の推進者として有名であるが、オックスフォード大学時代は中距離ランナーとして知られ、一九二〇年アムステルダムのオリンピックでは一五〇〇メートルで銀賞を受け、またオリンピック選手村を首唱して、その実現に力を尽し、現在国際スポーツ界の先輩として重きをなしている。

羽田に見送りに行ったら、飛行機の出発が一時間延びたため、思いがけなくゆっくり話す機会を得たばかりでなく、その後半は山の話しで持ち切ったのは、何とも愉快なことであった。

氏は若いときから山に親しみ、七十三才になる今でもときどき出かけているそうで、日本山岳会とその活動やアルパイン・クラブとの友好関係、日本の山の様子やヒマラヤ遠征のことなどを熱心に聞き、ハント、ノイスなど親しい山友の名を挙げたが、いちばん親しいのはウィンスロープ・ヤングで、二人とも第一次大戦のとき、伊墺国境方面のイソンゾ戦線で戦い、カポレットの敗走のときには、砲弾で右膝をくだかれたヤングをボロボロのフォードにのせて落ちのび、きわどいところで敵手におちることを免れた。そのときかれを担架にのせて長時間担いだくるしい思出は忘れられない。ヤングは間もなく膝が屈伸する義足を手づくりして活躍をつづけ、その後も登山をやめなかった。しかしある年チナル・ロートホルンにガイドのクヌーベルと登ったとき、降路の急崖で転落し、クヌーベルに支えられて宙吊りになり、近くに居あわせた友人の加勢を得て、命を全うしたが、そのとき友人のガイドは、このショックで役に立たなかった。さすがのヤングもそれ以来山行を思い止まった、という話しを聞いて、すぐ私にはこの間なくなった会員の橋本竜伍君のことが心に泛んだ。脚がわるいのにも拘らず、大臣になっても山のぼりを続けていた同君が、大学を出る年の冬、西岳から槍に向う途中で滑落し、九死に一生を得たが、それから冬山だけは止めたという話しをしたかったのだが、飛行機が出ますという声に、この楽しい山話しを打ち切られたのは、残り惜しいことであった。

立教大学山岳部 四十周年 記念祝賀会

立教大学山岳部では十月五日、東京、日比谷公園内松本楼で創立四十周年記念パーティを開催した。

出席者は辻山岳部名誉会長をはじめ、福田部長、先輩、現役など約七十名で、来賓として松方日本山岳会長、太田立教大学OBクラブ会長、佐々木同体育会会長も列席し、それぞれ祝辞がよせられたが、当日はナンダ・コート登頂記念日にもあたるので、OBから初のヒマラヤ遠征の想い出話や、創立当時のかずかずのエピソードも紹介され、和やかな歓談のうちに過した。

カット・佐藤久一朗

十一月理事・評議員会

一日・ルーム

▽出席者渡辺副会長、理事折井、山崎、川上、金坂、村木、田村、木下、徳久、古沢、評議員交野、石原東京支部長、須賀東海支部長東京支部岩佐

▽委任出席松方、三田、辰沼、田辺、松本、神谷、今西、青木、織内、牧野、伊藤、荒巻。

▽議事と報告

①年次晩餐会について

・期日、十一月二十八日、場所、茗渓会館、会費千円。

・「この一本展」を開きたい。五、六〇名の人に出品依頼をする。

・本年度海外登山に行った入を招待する。各隊とも五、六枚程映写していただく。

②38年度海外登山審査申込報告

大阪市大　ランタンリルン
北　大　ナルカンカール
同志社大　サイパル
大阪大　P29（第二次）
都立大　カンチェ周辺
神戸大　南米（ボリビヤ）
福岡大　ギャチュンカン
他に東大・東農大・日大・千葉大がある（学術割当）

③文部省主催冬山講習会協力依頼について

・十二月上旬、妙高にて指導者講習会が開催されるにつき講師派遣依頼あり、本会から徳久・田村両理事を派遣する。

十二月理事会

六日・ルーム

▽松方会長、渡辺副会長、理事折井、山崎、辰沼、川上、中島、金坂、村木、木下、皆川、古沢、監事松本、評議員交野、永井大分支部長、東京支部芳野。

委任出席、田辺、徳久、高橋、田村。

▽議事と報告

①山日記について（皆川）

・昭和三十八年度山日記を十二月一日発売、発行部数四万、定価三〇〇円。会員頒価二七〇円。

②東京支部主催、富士山氷雪技術講習会について（芳野）

・十一月三十日―十二月二日まで東京支部の会員を中心に行った。受講生のマナーがよく、楽しい集いであった。山梨支部からも三井支部長ほか会員の方に参加援助していただいた。

受講生　三十七名
リーダー及びコーチ　十五名
計　五十二名
以上

第二二一回小集会

◇日時　昭和三七年十一月十五日（木）六時半

◇会場　上智大学、上智会館第六会議室

◇研究題目　「富士山の雪崩と遭難」、その他

◇講師　深瀬一男（日大OB）
栗林一路（青学大監督）

◇出席校

★年次晩餐会

一九六二年の年次晩餐会は、本年度海外登山隊の歓迎を兼ねて、昨年と同じ大塚の茗渓会館で開かれた。今年もやはり雨が降ったが、参会者は近藤、冠、槙の名誉会員、山形、新潟、山梨、東京、静岡、関西各支部長や地方会員のほか、三日前にイタリアから着いたフォスコ・マライニ氏と秘書のタルモンティ女史、海外遠征に活躍した会員など百三十四名に達し、従来にない盛会であった。

一同は先ず会場の一隅にならべられた、会員有志が自慢の秘蔵書に解説をつけた「この一本展」を観賞したのち、食卓についた。

折井理事から開会を告げ、満場の拍手によって推された藤島評議員のワサビのきいた軽妙な司会のもとにテーブル・スピーチが始まった。三田副会長の挨拶、槙名誉会員の発声で乾杯の後、大阪府大の中尾佐助(ヌプチュー)、日大の石坂昭二郎(ムクト・ヒマール)、早大の吉川尚郎(ペルー・アンデス)、日本岳連の高橋照(ジュガール・ヒマール)、北大の初見一雄(チャムラン)、京大の加藤泰安(サルトロ・カンリ)諸氏から簡潔な遠征報告があり、自動車に乗ったばかりに、雨中の大混雑にまき込まれて遅参した松方会長は、短い挨拶のうちにクラブとしての日本山岳会のありかたを説いたのち、会員おなじみのマライニ氏を紹介して、その発言を促した。氏は流暢な日本語で久闊を舒し、こんなに世界の各方面に登山隊を送り出した山岳会は類がないと賞め、登山家の間には国籍を超えた理解があり、何のわだかまりもないと、面白いエピソードを交えて一同を喜ばした。麻生武治氏は、英伊語をおりまぜながら、独特の話術でデマベンド(イラン)登山談に満場を賑わし、デカン高原の調査旅行から帰った西丸震哉氏は、この辺の山の高さは数百メートルに過ぎぬが、岩のぼりには事欠かぬ、レプラやフィラリヤに感染したとは差当り思えぬが、潜伏期が過ぎたらどうなるかわからぬと、昨年この席での予告を確認して、一同の胆をひやした。

食後各遠征隊から「この数枚」ともいうべき、選り抜きのスライドを披露して、この楽しい会合を閉じたが、談笑はまだ暫らくの間やまなかった。(日高信六郎記)

▽出席者

・岩永信雄、鈴木利信、近藤茂吉、吉田竹志、川崎隆章、野口末延、諸岡一次、佐藤隆太郎、藤島敏男、安彦六郎、今井雄二、大森藤政、高橋照、田口三郎助、山本朋三郎、柴田晴彦、小野利次、冠松次郎、佐藤久一朗、米田文郎、木下是雄、藤原武夫、梶本徳次郎、吉沢一郎、皆川完一、島田巽、織内信彦、山本忠誉、小林義正、深田久弥、村井米子、油谷次康、坂本矩祥、平山善吉、網蔵志朗、隈部恵子、山口健児、三井松男、君島久登、日高信六郎、芳野菊子、中尾佐助、石原憲治、鈴木英一、茶谷東海、小原勝郎、麻生武治、日下田実、松本熊次郎、大橋晋、杉山孝、見学玄、広谷精啓、河野幾雄、山下一夫、長沼真澄、坂倉登喜子、池田光二、遠藤禎一、川上隆、槙有恒、小方全弘、須田紀子、渡辺公平、後藤幹次、今井喜美子、水野祥太郎、工楽英司、三田幸夫、折井健一、青木昇、田村扇一、宮原巍、古沢肇、神谷恭、西郷正郎、杉浦耀子、瀬名貞利、外山義夫、山崎安治、関口周也、細川沙多子、小泉満、東浜義男、野荻守、和田一男、佐藤テル、八巻功、長尾悌夫、松田雄一、蓮田清、岡義雄、小味秀純、爪生謙吾、中島伊平、石鍋孝夫、近藤信行、中河与一、渡辺操、栗栖勝雄、TALAMO NTY、牧野文子、牧野四子吉、マライニ・フォスコ、春田俊郎、石坂昭二郎、今井嘉道、木村利人、村木潤次郎、船越好文、徳久球雄、鏑木昇、村井葵、滝口脩、朝井一男、奥川雪江、芳野赳夫、西丸震哉、斎藤平七、斎藤健治、根谷崎武彦、千葉重美、河合亨、川森左智子、竹田寛次、松方三郎、吉川尚郎、初見一雄、交野武一、高橋進、加藤泰安、今西錦司、辰沼広吉、片山全平。以上百三十四名。

▼昭和三十七年十一月二十八日〝この一本展〟の記事、9頁図書紹介欄に掲げました。(編者)

・一橋大、明治学院大、理科大、明治薬科大、武蔵大、千葉大、武蔵工大、昭和医大、工学院大、青山学院大、東京薬大女子部、拓大国学院大、お茶の水大、東洋大、日大医学部、上智大、電機大、横浜国大、成蹊大、電通大、芝工大教育大、立大、専修大、農大、中大、日大、明大。

日本山岳会東京支部(富田美知子黒沢康子)

・今回は日本山岳会学生部の研究部門として「遭難対策」を受持つ青山学院大学山岳部の主催で行われた。たまたま十一月下旬に富士山で合宿訓練を行う学校が多いので、それに関連して過去の富士山における雪崩の遭難事故について検討をした。合宿を間近にひかえて各校とも熱心な態度で参加し、「遭難対策」の一環としてもたれた本集会の意義を大いに盛上らせた。

・なお研究題目の終ったあと、青山学院監督栗林一路氏から今回の研究集会主催のあいさつと、「孤独」についての講演があった。

「孤独」については、例の大平洋ヨット横断の堀江謙一君の例もひかれ、登山者が山に入ったときの心理について興味深い話があった。

・研究会終了後、学生部の例会に入り、中間報告と今後の活動についての説明があって九時三十分閉会した。閉会時刻が制限されたため、例会の方はやや時間不足の感があった。

第二二二回小集会

◇日時　37年11月19日(月)6時

◇会場　体協会議室

◇講演とスライド

サルトロカンリ登頂

◇講師　京都大学学士山岳会副隊長　加藤泰安氏

▽来会者氏名

・伊藤敞、交野武一、広谷精啓、江藤文夫、藤原武夫、織内信彦、諸岡一次、野口末延、網蔵志朗、関口周也、吉沢一郎、田村扇一、野村勉、倭島進、鈴木健吾、小貫伸一、千葉重美、村井米子、折井健一、飯島昭雄、折井正子、野村孝義、堀田弥一、深田久弥、芳野菊子、吉田薫、小峯顕一、松田雄一、川津鉄礼、佐藤隆太郎、八巻功、日高信六郎、川上順子、須田紀子、酒井忠夫、近藤信行、山崎智弘、山崎徹、小林義正、マライニ・フォスコ、牧野文子、富田美知子、増田洋子、長尾悌夫、医科歯科大山岳部、渡辺公平、以上四十六名。

× ×

本号目次

・鈴木牧之と高頭さん……一
・回想の岳人(1)……二
・大井川しぐれの宴……三
・Wilfrid Noyceの遺著……四
・ブモリの初登頂……四
・中房温泉の日本アルプス登山者名簿……六
・図書紹介……八
・ノエル・ベーカーと山を語る……一〇
・立教大学山岳部四十周年記念祝賀会……一〇
・年次晩餐会……一一
・会務報告……一〇
・学生部の動き……一二
・沼井鉄太郎遺稿……一二
・地図と地名……一三
・「山岳日記」について……一四
・支部報告……一四

……学生部の動き……

カット・上田哲農

☆リーダー会（37年4月20日）
◎場所、日本大学（六時）
◎出席校、日大、専大、法大、都立大、農大、青学大、早大、明大慈恵医大、中大、武蔵工大、拓大
◎テーマ、今後の学生部のあり方について話合う。
親睦を主眼とし、野球大会やその他の会合を企画してみてはという意味の意見も多かった。
今年度の役員担当に当り、各校の希望意見をきいた上、なるべく多くの学校に割当るよう、また副委員長校をきめて、委員長校を助けることに意見一致を見、散会した。

☆6月例会（6月16日）
◎場所、日本山岳会ルーム
◎出席校、中大、立教大、農大、都立大、拓大、防衛大、武蔵工大青学大、東京電機大。
◎テーマ、37年度夏山計画について話し合った後、日本山岳会竹田吉文氏から南米の山その他についてお話を聞いた。

☆学生部リーダー会（7月6日）
◎日本山岳会ルーム
◎出席校、中大、日大、東京女子大、学習院大、お茶の水大、教育大、武蔵工大、東京理科大、電気通信大、明大、専修大、千葉大医学部、東京薬科大、法政大。◎講師日本山岳会高橋進。
◎テーマ、37年度委員校を左記の通り決定承認を得た。
●委員長校—中央大学
●副委員長校—日本大学
●器具—早稲田大学
●食糧—明治大学
●気象—法政大学
●医療—日本大学医学部
●遭難対策—青山学院大学
●通信—東京電機大学
つづいて名簿作成のため、各校に原稿を依頼。その後東京理科大教育大の遭難について状況説明を聞き、そのあと高橋進氏から前年度役員との連絡を緊密にすることこの種の会合には積極的に出席してもらって今後の学生部の発展に協力していただくことが望ましいとのお話あり、九時散会した。

☆学生部十五日会（9月17日）
◎場所、体協会議室
◎出席校、青学大、上智大、立教大、早大、お茶の水大、慈恵医大農大、国学院大、理科大、拓大、専大、武蔵工大、中大、芝浦工大明大、電通大、日大、中大。

沼井鉄太郎遺稿

☆☆☆☆☆☆☆☆
登頂のすぐ後に ⑨
☆☆☆☆☆☆☆☆

……アンナプルナ初登頂……

一九五〇年フランス隊によってアンプルナ（八〇七五米）が八千米級の内最初に初登頂されたことは、今では余りに有名であり、これについて書かれた本や記事は枚挙にいとまがないほどであるが、次に主として下記文献によって勉強することにしよう。Maurice Herzog, "Annapurna, Premier 8,000" (1952) 近藤等訳・一九五三年七月五日白水社初版発行「処女峰、アンナプルナー人類最初の8000米登頂」（一九五六年六月五日五版による。

原著者エルゾーグは、三十一歳の若さで隊長であり登頂者の一人となったが、その代償というにはいたましい手足の凍傷を病院で治療中口述したというのがこの本である。筆者とても訳者と同じように感動が先行して、中々本篇の着手というまでには行かなかった。

フランス隊はドーラギリの試登後、カリ・ガンダキの支流ミリスティ・コラの峡谷をからんで北面からアンナプルナ主峰へ攻撃を開始し、六月三日午前六時エルゾーグ隊長とルイ・ラシュナルの二人は、惨めな第五キャンプを出発した。朝戸出のお茶も止め、ザイルは持たない軽装で、アイゼンの爪を氷板とクラストの雪に喰いこませて行った。然し酸素補給なしの登高は、意志だけで打ち勝たなければならない辛さだった。最後のクーロアールは急峻だが登攀可能に見えた。もう正午過ぎだったがエルゾーグは時間の意識を失った数分前にキャンプを発したような感じだ、といっている。然し

「今や、僕らは目的が達成できるという気持だ。いかなる障害も僕らを引止めることはできない。お互いに相手をみて相談する必要もない。相手の眼の中には確乎たる決意を読みとるだけだ。左にちょっとそれ、なお数歩……頂上はしらぬ間に近づいてくる。岩の塊をいくつか避ける。僕らはどうにかやって体を持上げる。ほんとうか？……

そうだとも烈風が頰を打つ。僕らはいるのだアンナプルナの頂上に。

八、〇七五米。

僕らの心からいいつくされないよろこびが溢れ出る。

〈ああ、仲間たちみんなが知ってくれたら！〉

みんなが知ってくれたら」

直前からの不抜な確信に続いて正に登頂と同時に反応し爆発した感激である。雪庇のある頂上の氷稜、反対側の垂直の絶壁、見はる↖

地図と地名

武田久吉

会報編集係から、前号（二二三号）所載の国土地理院西村蹊二氏の「地図と地名について、—尾瀬附近—」に対する意見を求められたが、私としては特に書くことはない。只「見晴」なる新名が、その地の小屋の持主達が異口同音に賛成して決定したものでないことは事実であるし、第一ああいう低地から山を仰望する地形の所を見晴と呼ぶことは日本の慣例に反するのだから、若しも小屋主を集めて意見を求められた時、仮令異口同音に「見晴」が提案されたとしても、モット合理的な名にするよう勧められれば宜しかったであろうにと思う。

口の重い桧枝岐の人達を向うに回して、口達者に横車を押す者が一人でも居れば、その結果は推して知るべしである。

×

拙文（二二二号、「尾瀬の地図と地名」）が会報に発表されない前に、地理院の方々が訪問されて、尾瀬附近の地名について尋ねられたので、長時間に亘って愚見を申述べ、また色々と内情を承わり、

◎講師、日大金坂OB、中大大野OB、慶大田辺OB、日大菅原OB、高橋OB。
◎テーマ、今回は出席校が多かったので、自己紹介を行い、各校それぞれ今年の夏山合宿の報告を行った。また理科大の捜索の経過報告、今後の方針を聞いた。その他夏の剣でのマキの使用問題、今年の新入部員の一般的な傾向、および「しごき」の問題について話し合った。

☆学生部委員会（10月10日）
◎場所、青山学院大学三階会議室
◎出席校、日大医学部、中大、電機大、日大、明大、◎OB、日大菅原省司、高橋正彦、明大橋本清の各氏。
◎テーマ、各種研究会をはじめ学生部の活動が一般に消極的なので昨年の委員長校と今年の委員長校に集まってもらい話し合いをしたいと思ったが、出席校が少なく十分な成果は得られなかった。
　経理の面では、年間の予算五万円を運営を円滑にするため早期に出してもらうように会に交渉したいということに大体意見の一致をみた。その他、十月二十一日学習院での野球大会についての連絡をする。

☆学生部十五日会（10月15日）
◎場所、日本山岳会ルーム。
◎出席校、農大、明大、専大、青学大、上智大、拓大、芝浦工大、理科大、中大、◎OB明大橋本氏鈴木芝浦工大コーチ。
◎テーマ、十一月以降の山行計画冬山、春山の計画発表、各校の研究会予定等について話し合い、意見の交換を行った。理科大の捜索経過発表、今後も学生部として援助をすることをきめて散会。

☆ソフト・ボール大会（10月21日）
◎学習院大、（一時）
◎出席校、学習院大、中大、明大立大、日大、専大、上智大、都立大、芝工大、武蔵工大、青学大。
◎さまざまなユニフォームやトレーニングパンツをはいて華々しく目白の空のもとに十一校約百二十名の山男が勢揃いし、持ちなれないバットをふるって技を競った。
　試合はトーナメントで行い、各校相当の成績をおさめ、暗くなるころまで、日曜日の午後を楽しんだ。その後グランドの一隅で、各校が手土産として持ちこんだ清酒に咽喉をうるおし、七時ごろ解散した。
（担当高橋進・日大神崎忠男）

▼17回国民体育大会登山部門
　昭和三十七年十月二十一日から六日間、岡山県蒜山（ヒルゼン）で行われ本会から渡辺副会長が出席した。

↙かすポカラの沃野、そういった絶巓の地形と展望が、登頂者を更に有頂天にした。遠征使命が果された以上に偉大な成就を感得し、感激の情に締めつけられ、これほど大きく純粋なよろこびを味ったことはない、といわせている。
　ラシュナルの下山を促す声に待ったをして、エルゾーグは「熱に浮かされたようにルックザックの中を探しまわして、写真機をとり出し、奥にしまいこんであった小さなフランス国旗と山岳会の旗をとり、ルックザックの中で汗と食糧とでよごれたこの布片を唯一つの旗竿たるピッケルの柄に結びつけ、写真機を調節してラシュナルに渡す。」せかれながら撮影の反覆カラー・フィルムも入れかえて、登頂記念と最高所展望の撮影を済ました。
　本の写真で見ると「一九五〇年六月三日、午後二時、アンナプルナの頂上に立つエルゾーグ隊長」と記されて、氷稜上の彼は左手にピッケルを握り、石突の方に結んだ三角旗（フランス山岳会旗か）の一端を右手でつまんで、頭上に掲げている。この旗の結着箇所は通例の国際登山慣例（二国以上の旗）の場合のアックス寄りでそれを最上方にかざしているのとは、様式が違う。
　エルゾーグは再度ラシュナルに下降を催促されたが、「だがしかし、僕には勝利を得たのだという考えがまだぴんとこない。この雪を踏みしめているということが信じられないのだ。
　ここにケルンをつくることはできない。石はなく、すべてが凍結している。
　ラシュナルは足踏みしている。凍ってきたように感じているのだ僕もそうだ！　しかし、そんなことはほとんど気にもしない。人間が征服した最高峰！　それが僕らの足下にあるのだ！」との言葉を残している。
　感激の高潮はまだ続いたが、ヒマラヤの先駆者たちに思いがめぐってから、その歓喜は漸く謙虚な気持に染まって来て、チームの努力と犠牲の賜を思い、自らの青春時代の山登りを回想したりした。
　下降の間ぎわエルゾーグは高度計を出してみて、八五〇〇米の指針にやりとする所など、流石に登山家だと感じさせる一方、登頂感激はも早満足感の平衡状態に移っていることを物語っている。
（以下次号に続く）

沼井鉄太郎氏の遺稿について
・沼井氏(三十四年七月二日急逝)の遺稿〝登頂のすぐ後に〟は、会報一九六号から二〇四号まで毎号連載されたものであるが、今回その続篇（九―十三篇）が筐底から発見されたので続けて掲載しておきたい。

地図製作上の苦衷を聞かせて戴いた結果、私が未解決の部分もあったので、九月に入ってまたも尾瀬を訪ね、主力を尾瀬ヶ原に集中して、私がかねてから疑問を持っていた流水の名称を明らかにして、之を報告して訂正を御願いして置いたから、明年にでもなって改訂版が発売される折には、少くとも現在のものよりも確実な地図が発行されるであろうと期待している。

×

　尾瀬附近の図は、登山者の使用の便を目的とするものと解釈する。特別天然記念物の指定区域内であること故、新らしい小径ぐらいは将来出来ることはあっても、曽て魚を釣った場所が湖底に沈むようなことはよもあるまいし、また今年のような旱天の続いた年でも、水線のない沢にも水は平常通り流れていた。
　西村氏の「回答」は大体一般論で、私の指摘が誤っていたという反論ではないのだから、意見をたたかわす必要は認められない。

▼今年の木暮祭
　昭和三十七年十月二十日～二十一日金峰山麓金山平で行われた。本会から三田副会長、神谷恭が参加した。催しのあと三田、神谷の両名は紅葉のみずがき山に遊んだ。（神谷記）

佐藤久一朗画

「山岳日記」について

皆川完一

本会で編集している〈山日記〉と全く同じスタイルの山の日記帖が出た。

この本が〈山日記〉に似ているのは、外見だけにとどまらない。〈山日記〉の愛読者なら誰しも気づかれるであろうが、その内容にもそっくりのところが非常に多い日記欄、自由記入欄、白紙、方眼紙のページ、天気図あり、住所録ありで、本文編に至っては、〈山日記〉と版づらの大きさまで同一で無断盗用された記事が目立つ。

あまりにも似ているので、会員や愛読者の中で不思議に思われる方がいられると困ると思い、〈山日記〉の編集者として、「山岳日記」について一言しておきたい。

ところでこの「山岳日記」は、記入欄一三五ページ、本文一七四ページからなっている。問題はその本文編であって、〈山日記〉風の第一頁には以下を「資料編」と銘うっている。この名称は恐らく山と渓谷社の「登山手帖」第一集から借用したものであろう。

まず最初に「スポーツ登山について」という見開き二ページの文章があり、以下四八ページまで、登山についての注意が続くわけだが、「山行装備表」は、明らかに〈山日記〉の「登山用装備表」のやきなおしである。代表的山行を一〇種から七種類に縮め、規格や重量の欄を省略し、中に食料や救急薬品を加えているなどの違いはあるが、誰がみても両者の関係は明瞭であろう。

四九ページ以降は、文字通り「資料編」にあたる部分である。まずとりあげたいのは「山の臨時電話」であるがこれも〈山日記〉のやきなおしで、新しい資料によったものではない。〈山日記〉の六二年版「臨時通信施設」は、昨年電電公社から資料を仰いだものである。今度も〈山日記〉は資料を提供してもらったが、六三年版では「山小屋一覧」の中に組み入れて、「表」は載せなかった。もちろん〈山日記〉の表そのままというわけにはいかないから、多少の塩梅を加えてはあるが、そのために「立山山頂」と「立山弥陀ケ原」を落してしまっている。

「山行コース案内」も、六二年版〈山日記〉の「登山行程表」そっくりそのままである。〈山日記〉では毎年改訂して、年々誤りを少なくし、新しくしているが、今度改訂したところを比較してみると当然のことながら旧態依然である。これなど「山岳日記」の中で〈山日記〉盗用の最たるものである。かって「登山行程表」は山と渓谷社の「登山手帖」に利用されたことがあった。こうたびたび方々に転載されては、「登山行程表」の光栄といったらいいか、それとも受難というべきか。

「日本登山・探険・紀行史年表」は、長尾宏也氏の「登山・歴史と背景」（ダヴィッド社、昭和三十三年七月）と比較してあきれる。この年表はその材料の大部分を長尾氏のものからとり、〈山日記〉の「日本登山年表」と合わせて、多少の色をつけたものである。

「大宝元年（七〇一）慈興上人、立山を開く」と「和銅三年（七一〇）慈奥上人立山開山の途につく」とあるのは明らかに重出で、〈山日記〉の説と長尾氏の説とを並べたにすぎない。「永享五年（一四三三）足利義政、富士見紀行」とあるのは、永享四年（一四三二）足利義教富士見旅行」とするのが正しい。これも長尾氏の年表から孫引した例である。また役小角の生年や「万葉集」の成立も長尾氏によっているが、あてになる説ではない。他人の著作を利用する場合、説が分れる時は取捨選択を、事実についてはその吟味を忘れてはならない筈だ。

次は「日本の山岳」である。これは一八〇〇メートル以上の山のうち、とくに登山の対象になる山五七五座をえらび、五十音順に並べて高度・五万分の一地図名・行政区画を記したものである。このやり方は「登山手帖」第一集をまねたもので、ともに六二年版〈山日記〉の「日本の山」を材料としているが〈山日記〉の誤りをそのまま尊重していただいたのには恐縮。

〈山日記〉の六三年版では、高度を一六〇〇メートル以上まで下げ、地図上に名前のない山も多少加えた。新しい地図では測量しなおした結果、標高が変っているものが多い。今年はできるだけ最新の地図を集めて調査しなおしたから、「日本の山」は面目を一新したわけである。

「山の用語集」は、六〇年版の「登山用語」を使って、適当に手を加えたものである。もう少し注意深く使っていただかないと困るところがある。原語の綴りなど甚だたよりないものだ。

最後に「地図図幅一覧」。これも行程表と同様、そっくりそのまま六二年版を利用している。写し誤りを除けば、あとは〈山日記〉の感心しないところまで真似している。はずかしいことだが、六二年版まで〈山日記〉は、国土地理院

東京支部報告

十一月七日（水）役員会

一、第三水例会の件

〃冬山を迎えて〃 折井理事を囲んで座談会

一、第三水曜例会の出席者には名前を書いて貰い親睦を計る

一、会計報告

一、氷雪技術講習会の件

一、〃山岳〃五十七年の広告掲載依頼の件

出席者

石原、折井、芳野、中、宇田川
野萩、鈴木、錦織、岩佐、関口
三枝、山口、富田　十三名

以上

東海支部報告

◇ルームの開設と定例集会

●当支部では、今回左記にルームを開設、毎月第二木曜日を定例集会日と定め、午後六時半から須賀支部長ほか有志が集まって親睦を計っています。

他支部の方のご来会を歓迎いたします。当地をご通過の節にはぜひお立寄り下さい。

◇ルーム開設場所（地図参照）

●名古屋市中区御幸本町通り
三丁目十一番地　水谷商店内
(tel)本局代表㉓七五三八

・交通機関

の地図修正にあまり注意を払っていなかった。六三年版は国土地理院提供の八月現在の資料で大修正を行ない、測図年を新しくし、図幅名の変ったところがある。従って「山岳日記」はここでも一年おくれの〈山日記〉である。

×

こうなっては編集者の良心も、出版道義もあったものではない。「無断転載を禁ず」の文字もあってなきに等しく無視されてしまった。一体この本の編集者は誰なのであろうか。執筆者の署名がないのも妙だが、全体の編集責任は誰がとるのだろうか。「創刊の辞」位あってもよさそうだが、「まえがき」も「あとがき」もこの本にはない。編集者は雲がくれして、その名はどこにも見えない。

まさか全日本山岳連盟の企画ではあるまい。悪い風習だが、くわしく検閲もしないで編集者や出版社に監修者の名前を貸すことがよくあるらしい。仮にそのようなものであっても、監修者はもちろん責任の一端を負わなければならない。全日本山岳連盟はその名誉のためにも、このようなインチキ書と関係しないようにしていただきたい。「類似品あり、御注意を乞う。」とは他の商品では聞かぬこともない。ただ出版物については、ついぞ今まで聞いたことがなかった。

（筆者は本会「山日記」編集代表）

名古屋駅から市バスにて
①名城正門前行
②市役所経由守山行、御幸本町通り下車

▼**上高地山荘の冬季閉鎖**

・明（38）年四月末日まで、冬季閉鎖をいたします。詳細は、本会信濃支部（松本市大名町 高山忠四朗方）へご照会下さい。

前号 二二三号（訂正）

	誤	正
1頁2段	ないであろ	ないであろ
5段	×目茶苦茶	○滅茶苦茶
16頁3段	×年37月10日	○37年10月25日

昭和三十七年十二月二十五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
発行所 社団法人 日本山岳会
編集者 古沢肇
電話神田(291)八九五二番
振替口座東京四八二九番
頒価二十円

東京都港区赤坂溜池五番地
印刷所 株式会社 技報堂